

〔第2回 TUFSS ジェンダー研究の^{いま}現在〕

過去と現在の対話としての歴史学とジェンダー ——イタリア史を中心に——

Gender History as a Dialogue between the Past and the Present: A Case of WWI in Italy

小田原 琳
ODAWARA Rin

東京外国語大学大学院総合国際学研究院
Tokyo University of Foreign Studies, Graduate School of Global Studies

キーワード
ジェンダー史 イタリア史 第一次世界大戦 性別役割分業

Keywords
Gender history; Japan; Italy; WWI; Silvia Federici; Gender division of labor

Quadrante, No.24 (2022), pp.135–138.

目次

1. ジェンダーへの関心——自分自身の問題として
2. ジェンダー史研究との出会い
3. ジェンダー視点から見るイタリア史
4. ジェンダー史の意義

本稿は、2021年12月10日に東京外国語大学海外事情研究所が主催し、ジェンダー研究の関心をもつ学部生・大学院生を対象として行われた企画「TUFSS ジェンダー研究の^{いま}現在」での講演に基づく。

1. ジェンダーへの関心——自分自身の問題として

私は1991年に、当時は外国語学部しかもたなかった東京外国語大学の、外国語学部イタリア語学科に入学した。この年イタリア語学科は一学年35名で、女子学生は28名、男子学生は7名であった。全体でも、女子学生の割合は今と同じように、五割を超えていた。ところが研究を続けたいと同大学院地域文化研究科博

士前期課程に進学した途端、男女の比率が反転する。このことにまず衝撃を受けた。そしてそれは、女性として研究者を志すことの、わかりやすい障害から言語化することのできない困難までをはらむことであった。

わかりやすいところと言えば、いわゆる「キャリアモデル」の少なさは決定的であった。学部時代のイタリア語学科の専任教員五名はすべて男性で、女性は非常勤講師か、母語話者教員しかいないとき、通年で、恒久的に教壇に立つ自分の姿を、女子学生が想像するのは難しい。大学院の、学部とは比較にならない深度の学究的対話がなされる場所で、マイノリティであることは空間自体の息苦しさであった。院生同士の関係性も凝縮度を高める一方で、性に基づく不平等を提起することの難しさ、荷の重さもことさら大きかった。当然——と言わなければならぬのはほんとうに悲しく、憤りを感じる——セクシュアル／アカデミック・ハラスメントを受けて、大学院を去っていく友人の女性たちも複数いた。

1990年代には大学であっても「ジェンダー」



という概念は一般的ではなく、日常的な違和感
は大きいけれども、それを研究にどう結びつけ
ればいいかはいつそうわからなかった。近代
史をおもしろいと思った私は、19世紀イタリア
における国民形成や社会問題、ナショナリズム
などを勉強していたけれども、そこに「女性」あ
るいは「ジェンダー」の視点をどう組み込めば
いいのか、わからないままだった——なにしろ
史料のなかの語り手たちはみな、エリート男性
たちだったから。それもまた、身近に女性研究
者が少なかったことによるだろう。どう言おうと、
女性史もジェンダー史も女性研究者たちの手
によって切り拓かれてきた分野であった。

2. ジェンダー史研究との出会い

その間に、荻野美穂によるジョン・スコット
『ジェンダーと歴史学』の翻訳刊行(1992年、
増補新版2004年)があり、上野千鶴子、江原
由美子といった社会学者たち、スコットの翻訳
者である歴史家荻野などによる、日本のジェン
ダー・フェミニズム研究に触れ、学んでいくよ
うになったが、自分自身のイタリア史のフィール
ドとはどこか分裂した状態が続いていた。

分裂を架橋するいくつかのトライアンドエ
ラーのなかで一つの大きな転機となったのは、
2011年3月の、東日本大震災と原発事故とい
う、研究とは一見かかわりのないできごとだっ
た。とくに、原発事故をめぐる、日々の暮ら
しにも大きな影響を及ぼすものとして、危機感
をもって向き合うかどうかという対応にジェン
ダーの違いがあり、そうした反応に対する差別
や軽視があった¹。ジェンダーによって異なる認
識の根底には、性別役割分業の問題があること
は明白だった。公私の領域の分化、それぞれ
に振り分けられた社会的役割の二つの性別へ

の一致は、普遍で自然なものという装いをとっ
ているが、近代以降に構築されたものであるこ
とは歴史研究においてはすでに自明のことで
あった。それがこの原子力災害にあっても一定
の秩序維持機能——ありていに言えば、すぐ
には発生しない、あるいは発生しないかもしれ
ない健康被害よりも、目前の経済的利益を優先す
るという選択——を果たしているのならば、構
造的＝歴史的テーマとしてのジェンダーは、今
日的課題である。

そのことを一層確信したのは、シルヴィア・
フェデリーチ『キャリバンと魔女 資本主義に
抗する女性の身体』(原著2004年、後藤あゆ
みとの共訳、以文社、2017年)の訳業を通じ
てであった。フェデリーチの代表作である本書
は、16～17世紀にヨーロッパにおいて猖獗を極
めた「魔女狩り」という現象を、マルクスの本
源的蓄積という観点から読み直した仕事である。
資本主義的な生産様式を実現可能なものにする
歴史的な段階として、マルクスは本源的蓄積
を、生産者と生産手段の分離と定義し、とくに
土地の囲い込みエンクローチャーという現象に求めた。フェ
デリーチは、本源的蓄積とは女性(生産者)が生
殖におけるさまざまな知識や自己決定(生産手
段)を奪われる過程でもあり、その剥奪は国家
による「魔女狩り」という恐怖をもって、土地
の囲い込みと同時期に遂行されたと指摘した(最
盛期において、魔女狩りの主役は教会ではなく
国家であった)。女性は自己の身体に対する自
律性を奪われ、生殖機能やそれにまつわる労働
(出産や子育て、家族のケアなど)は資本に服
従させられた。こうして生産労働＝男性／再生
産労働＝女性の分業が確立され、女性はひと
の再生産、すなわち労働力の再生産を担い、資
本を再生産させるために無償で奉仕するジェン

¹ このことについてはいくつかのところで書いたが、岩波書店編集部編『3.11を心に刻んで2019』(岩波書店、2019年)所収の拙稿を参照のこと。

ダーへと改変されていったのである²。

抑圧や暴力、脅迫を通じて女性から意思や行動の自律が奪われるとき、そこにはそれを可能にする力、権力が働いている。そして権力はそこからなんらかの利益を得る。そのようにジェンダーの歴史を捉える必要があることを、フェデリーチは私に教えてくれた。

3. ジェンダー視点から見るイタリア史

こうして獲得されたジェンダー視点を、最近取り組んでいる、第一次世界大戦と女性の経験に導入してみたい。第一次世界大戦は、戦時性暴力が初めて政治的・外交的議論の対象となった戦争である(戦時性暴力そのものははるかにさかのぼることができる)。交戦諸国は相互に、敵による性暴力を非難した³。さらにこのことは、国内において、戦時性暴力の起こりうる結果としての、「敵の子」、すなわち敵兵の性暴力による妊娠をめぐる異様な議論を引き起こす。イタリアでは1916年から17年にかけて、ある産科医が、「敵の子」を殲滅する手段としての墮胎の賛否をめぐる議論を提起した⁴。当時のイタリアでは人工妊娠中絶は非合法であったので(合法化は1978年)、これは異例の論争であった。

簡潔に述べるならば、圧倒的に中絶を「是」ないし「義務」とさえ主張する男性たちに対し

て、中絶するかどうかは女性自身が決定すると敢然と主張したのが、作家でジャーナリストでもあった女性、アンナ・フランキである。女性は生来の母であり、自身の内の新しい命が、野蛮な暴力のさなかに芽生えたことに苦しみはするものの、それを守りたいと思うかもしれない。墮胎という犯罪を選ぶ女性も、無垢の「私生児」を守ろうとする女性も、「心もちはさまざまであり、思いもさまざまである」として、自己決定を求めるのである。

アンナ・フランキは、自身の不幸な結婚を自伝的に描いた作品で批判を受けつつも有名になり、以後も離婚と親権について論じ、第二次世界大戦後まで女性の権利の拡大を主張しつづけたフェミニストである。同時に、第一次大戦時には熱心な参戦主義者でもあった。戦争そのものに反対していたわけではなく、また敵であるドイツ人(ドイツおよびオーストリア)に対する非難も激烈であった⁵。しかし、上記の論争において、男性たちが敵に対する憎悪をそのまま「敵の子」に向け、さらには中絶(という犯罪)を選ばない女性にも向けるのに対して、フランキは躊躇することなく、いずれにせよ女性自身が選択することだ、と繰り返し述べた。

フランキのこのような主張は、どのように解釈できるだろうか。彼女が使う「生来の母」「真の母」⁶といった表現を見ると、母性主義から発

² シルヴィア・フェデリーチおよび『キャリバンと魔女』については、拙稿『『キャリバンと魔女』の問い——マルクス主義フェミニズムを再考する』『福音と世界』73巻5号、2018年を参照。

³ Alberto M. Banti, *L'onore della patria. Identità sessuali e violenza nel nazionalismo europeo dal XVII secolo alla Grande Guerra* [Torino: Einaudi, 2005], 353–355. 非難は必ず敵に対して向けられ、味方による加害への問いには波及しなかったことには注意が必要である。戦時性暴力が当該社会においてどのように認識され、被害者がどのように扱われるかということ自体が、さまざまな現れの可能性をもつ歴史的現象である。現象がほとんどつねに見られるからといって、避けがたい、したがってどうすることもできない問題だと考えるべきではない。

⁴ Luigi Maria Bossi, *In difesa della donna e della razza. Polemiche-Discorsi-Referendum contro l'egoistico, rovinoso Neo-Malthusianismo, contro l'infamia dell'Antiuomo tedesco* (女性と人種の防衛において：エゴイスティックで破壊的な新マルサス主義、反人間ドイツ人の醜行に対する論争・議論・レファレンダム) [Milano: Dr. Riccardo Quintieri, 1917]. この論争については、Rin Odawara (2017), 'Violence against Women and the Racist Discourse during the WWI in Italy,' *Quadrante*, No.19 (東京外国語大学海外事情研究所) で論じた。

⁵ 当時の民法においては、女性側から離婚することはできず、離婚された場合、親権をもつこともできなかった。夫と別居後、残された子どもを育てるために作家活動を開始し(民法上、夫の許可なく財産を処分することができなかったため)、その後、ジャーナリストとして活動した。第一次世界大戦に際しては、戦争国債振興パンフレットの政策などにかかわる。息子二人が従軍し、一人が戦死。Emma Schiavon (2015), *Interviste nella grande guerra. Assistenza, propaganda, lotta per i diritti a Milano e in Italia*.

⁶ Bossi (1917), 101–102.

せられるようにも見える。しかし当時、同じようなレトリックで反戦平和を主張するフェミニストたちもいたことに鑑みれば、母性主義は必ずしも同じ政治的選択を導くわけではなかった。ここで、第一次世界大戦の特徴である「総力戦」を考慮しなければならないだろう。第一次世界大戦は、男性兵士のみならず、全国民がさまざまな形で戦争協力へと動員された最初の戦争であった。女性は、母性主義プロパガンダによって、生殖＝再生産を通じて国力の増強に関与させられるとともに、男性労働力の欠如を埋め合わせるための生産労働へも動員された。労働という観点から見ると、第一次世界大戦期の女性たちは、男性の代替としての生産労働（したがって賃金などは男性より低く抑えられていた）と、国家にとって望ましい再生産労働（したがって、「敵の子」は排除の対象となる）の両方を求められ、しかしどちらも自己に選択の余地がないという矛盾を生きなければならなかった。上記の論争において、男性たちは戦時性暴力を自らの名誉と関わる問題としてしか捉えておらず、現象の被害者であり、当事者である女性たちの声に耳を傾ける必然性を一切理解していない。総力戦のなかで、女性の自律性を抑制するジェンダー規範が軽減されるのではなくむしろ強化されたことを、「戦時性暴力～妊娠の継続か途絶か」という極限的な論点の立て方自体が示している。参戦を通じて女性解放を進めようとしたアンナ・フランクの苛立ちを、ここに私たちは読み取ることができるのではないだろうか。

4. ジェンダー史の意義

イタリアの第一次世界大戦の事例の読みは、女性の身体（労働力という意味でも、生殖という意味でも）は資本によって、あるいは国家によって利用され、さまざまなイデオロギーはそれを自然に、可能にするように形成

されるという歴史的な視点からなされる。それはスコットやフェデリーチ、日本のジェンダー史・フェミニズム史研究から学んだことであると同時に、原発災害後の社会や、また研究者＝職業人、すなわち労働者として自立する過程において、ジェンダーと社会的なものとの距離を測るという私自身の経験に根ざしてもいる。歴史を見る者の経験の多様さと深まりは、歴史の多様さと深さの発見につながる。研究者の世界のジェンダーやその他の多様性は、研究の進展と不可分だということだ（それは当然研究という仕事にかぎったことではない）。以前ある研究会で発表したときに、「ジェンダーの視点を入れることにどんな意味があるのか」と質問されたことがある。すでにある程度明らかになっている歴史的事実は、ジェンダー視点を入れても大きく変わらない、というのが、質問者（もちろん男性だ！）の意図だったと思う。いまよりも若くて未熟だった私はちょっとことばに詰まってしまったのだったが、いまならこう言うだろう。事実が大きく変わらないかもしれないし、変わるかもしれない。しかしそもそも、どのような社会にもジェンダー規範があり、その秩序は誰にとっても平等ではないことを私たちは生きて知っているのに、過去のできごとについてそれを明らかにせずに、「知っている」と言えるのだろうか？ 現在の多様性をひろげ、それを通じて過去と対話することによって多様な歴史を理解することは、歴史研究の最小限の誠実さにすぎないのである。